一章 八

那須

知り合いのいる那須の黒羽を目指して、那須野を横切って進むことにしました。ところが、雨が降って日が暮れてしまいました。農家でひと晩泊めてもらって、また歩きはじめましたが、歩きではなかなか大変です。途中で出会った農夫にお願いして、馬を貸してもらいました。馬にゆられていると、幼い子どもが二人、私たちのあとをついてきます。そのうち一人は、「かさね」という名前の少女でした。

かさねとは八重撫子の名成べし

曽良

小さな子どもを撫子にたとえることがあるが、この子は「かさね」だから、八重咲きの撫子だろう。

季語を味わう

撫子 ［夏・秋］

七月から十月にかけて咲く花。秋の七草のひとつだが、夏に咲きはじめることから、夏の季語とされることが多い。思わずなでたくなるような愛らしい見た目が名前の由来とされ、子どもや女性にたとえられる。

例 なでしこがその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日なけむ　大伴家持

愛らしい撫子、大切なあなたがその撫子だったなら、毎朝毎朝、この手に取って愛でるのだがなあ。

那須

現在の栃木県北東部。江戸時代には江戸と東北地方を結ぶ奥州街道の宿場があった。奈良時代から温泉地として知られていたとされ、今も那須温泉郷として有名。

黒羽

現在の栃木県大田原市の東部にあたる地域。江戸時代には、黒羽藩の城下町だった。芭蕉が『おくのほそ道』の旅でもっとも長く滞在したまちで、芭蕉に関する資料を展示する「黒羽芭蕉の館」や芭蕉の句碑などがある。

栃木県大田原市にある、黒羽芭蕉の館。芭蕉や黒羽藩に関する資料が展示されている。→ 129 ページ

那須野 歌枕

那須野原のこと。栃木県北部に広がる、広大な扇状地。那須の篠原ともよばれる。当時は石だらけの土地で、ほとんど住む人もいない原野だった。

『おくのほそ道』旅の目的と道のり

芭蕉はどうして『おくのほそ道』の旅に出たのでしょうか。旅の目的をふまえて、その道のりをたどってみましょう。

『おくのほそ道』旅の目的

旅の大きな目的は、みちのく（現在の東北地方）の歌枕（和歌によまれてきた名所、→40ページ）や、歴史の舞台となった地を訪ねることだったとされています。

芭蕉には、みちのくへの強いあこがれがありました。有名な歌枕が多く、尊敬する歌人、西行（→98ページ）や能因法師（→40ページ）が旅した場所だったからです。歴史ある社寺や史跡も多く、悲劇の英雄、源義経（→48ページ）が亡くなった地でもあります。

また、各地に暮らす弟子や、文化や芸術に親しむ人々と交流することも目的のひとつでした。

芭蕉は昔の人々の足取りをたどり、さまざまな景色や自然、史跡、人に接することで、自分の俳諧をみがきたいと考えていたのです。

この旅を通じて、私はいろいろなことを考えたり、感じたりしたよ。それによって、自分が理想とする俳諧に大きく近づくことができたんだ。

旅の道のり

芭蕉は弟子の曽良とともに、旧暦一六八九年三月二十七日に江戸（現在の東京）を出発しました。関東、東北、北陸地方をめぐり、八月二十一日に大垣（現在の岐阜県大垣市）に到着したとされています。

＊この地図では旧暦の後、（　）で新暦を示しています。『おくのほそ道』は日記や記録ではないため、旅に同行した曽良の日記（『曽良旅日記』）などをもとに、研究で推測された日付をのせています。

期間

一六八九年三月二十七日
～八月二十一日

距離

約六〇〇里
（約二四〇〇キロメートル）

はじめまして！
私は河合曽良といいます。
俳人で、芭蕉先生の弟子の一人です。
『おくのほそ道』の旅に同行して、
『曽良旅日記』を残しました。

河合曽良
（一六四九～一七一〇年）
信濃国（現在の長野県）出身

旧暦って何？

『おくのほそ道』に書かれている日付は、月の満ち欠けをもとにした旧暦です。旧暦は、新月になる日をひと月のはじまり（一日）とします。新月から新月までは平均約二十九・五日のため、暦と季節が毎年少しずつずれていきます。そこで数年に一度、閏月とよばれる月を入れて一年を十三か月とし、調整していました。

そのため、旧暦を新暦（太陽暦）に換算すると、その年ごとに違う日付になります。たとえば芭蕉が出発した三月二十七日は、いまの五月十六日ごろにあたります。

三章 二十七

山寺

山形には立石寺という、慈覚大師がひらいた山寺があります。すばらしい場所だと多くの人からすすめられたので、尾花沢からわざわざ引き返して向かいました。日暮れ前に到着した私たちを待っていたのは、心まですみわたるように静かにたたずむ山寺でした。

閑かさや岩にしみ入る蝉の声

心まですみわたるような、清らかな静かさ。蝉の声が岩にしみ入るようだ。

立石寺の開山堂。

季語を味わう

蝉［夏］

幼虫として数年～十年以上地中ですごした後、夏に成虫として地表に出てくる。その夏の一～三週間のあいだ、オスはメスに求愛するために鳴く。

例 やがて死ぬけしきは見えず蝉の声　松尾芭蕉

時を置かず死んでしまうことを感じさせないほど、激しく鳴いている蝉の声だ。

ニイニイゼミ。芭蕉たちが山寺を訪れた時期に鳴いていたとされる。

立石寺

山形県山形市にある寺。宝珠山にあり、山寺ともよばれる。九世紀に慈覚大師によってひらかれたとされ、僧が修行する聖なる地として信仰されてきた。

慈覚大師

平安時代の僧。円仁ともよばれる。下野国（現在の栃木県）生まれ。天台宗（仏教の宗派のひとつ）をひらいた最澄に直接教えを受け、東北地方をはじめとする各地で仏教の教えを広めた。唐（現在の中国）でも仏教を学び、帰国後に天台宗の総本山、比叡山をまとめる座主となった。

立石寺以外にも、中尊寺（→71ページ）や瑞巌寺（→66ページ）など、東北地方には私がひらいたり、再興したりしたとされる寺が数多くあるよ。

立石寺の根本中堂。いまの建物は十四世紀に再建されたもので、ブナ材の建造物としては日本最古とされる。

チャレンジ！「山寺」を音読してみよう

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覚大師の開基[※1]にして、殊に清閑の地なり。一見すべきよし、人々のすゝすむるによりて、尾花沢よりとつて返し、その間七里ばかりなり。

日いまだ暮れず。麓の坊[※2]に宿かり置きて、山上の堂にのぼる。岩に巌[※3]を重ねて山とし、松栢[※4]年旧り、土石老いて、苔滑らかに、岩上の院々扉を閉ぢて、物の音きこえず。岸をめぐり、岩を這ひて、仏閣を拝し、佳景寂寞として心すみゆくのみおぼゆ。

閑かさや岩にしみ入る蝉の声

現代語訳

山形の領内に、立石寺という山寺がある。慈覚大師がひらいた、世間のわずらわしさを感じさせない、ことに静かな地である。ひと目見るべきだという人々のすすめにしたがって、尾花沢からとって返し、その間の山寺までの距離は七里ばかりである。

日はまだ暮れていない。山のふもとの宿坊に宿を借りておいて、山の上のお堂にのぼる。岩に巌を重ねて山となっており、松や柏の木は古くなり、土や石は年を重ね、苔はなめらかになり、岩の上の数々の寺院の扉は閉じて、物音は聞こえない。岸をめぐり、岩をはって、仏閣を拝む。美しい景色はひっそりと静まりかえって、心がすみゆくように感じられる。

閑かさや岩にしみ入る蝉の声

※1 開基　寺院をひらくこと。また、寺院をひらいた僧のこと。

※2 坊　宿坊のこと。宿坊は、寺社などで参拝者を泊めるための宿。

※3 巌　大きくてごつごつした岩。

※4 松栢　松と柏。どちらも常緑樹で、一年中葉が落ちず、色が変わらない。

俳句に挑戦！

三 俳句を作ろう

俳句のリズムやきまりになれたら、自分で一から俳句を作ってみましょう。ここでは俳句を作るときの手順の例や、注意することを紹介します。

1 俳句の題材を考える

まずは、最近、季節を感じた出来事や、うれしかったこと、悲しかったことなど、心を動かされた経験を思い出してみましょう。文章でも、言葉だけでもいいので、思いついたことを自由に書き出すようにします。

家の近くの空き地の
菜の花
黄色　まぶしい
元気になる色
星みたい
はじめて名前を知った
花が小さくてかわいい

引っ越した友だちに会うために、自転車で隣町まで出かけた。久しぶりにのんびり話ができて楽しかった。風があたたかくて、春になったんだなあと思った。

2 季語を探す

書き出した文章や言葉から、季語を見つけましょう。よみたい出来事や気持ちにぴったり合う季語を探してもいいですね。季語を確かめたり、探したりするときには、歳時記を活用しましょう。

菜の花　春

春風　春

3 五・七・五にする

季語をひとつ選んだら、五・七・五にあてはめてみましょう。最初は文章のように書いてもいいですよ。

菜の花は
空き地に光る
星みたい

友だちに
春風のなか
会いに行く

4 表現を工夫する

順番を入れかえたり、入れる言葉を変えたりして、表現を工夫しましょう。その景色を思いえがいたり、想像をふくらませたりすると、新しい言葉が見つかるかもしれません。

書いた俳句から、景色を想像してみよう。空き地で星みたいに光っている菜の花は……

菜の花は
小さな星だ
まぶしいな

会いに行く
春風のなか
友だちに

最初と最後の五音を入れかえてみよう。「友だち」の印象が強くなるね。

5 俳句らしい表現を目指す

切れ字（→10ページ）を入れたり、思い切って省略したりすると、俳句らしくなります。読み手の想像を刺激するような表現を心がけましょう。

「菜の花は」の「は」を切れ字の「や」に変えてみよう。菜の花がより印象に残るね。最後はわざと言い切らない形にしたよ。

菜の花や
小さな星の
まぶしさで

最後を「隣町」にすると、読み手が「だれに会いに行くのかな。」と想像をふくらませることができそう！

会いに行く
春風乗って
隣町

6 他の人とよみ合う

俳句を作ったら、他の人と交換して感想やアドバイスを伝え合いましょう。黒板にみんなが作った俳句を掲示して、どの俳句がいいと思うか投票する「句会」をひらいてもいいですね。

俳句のさまざまな表現

体言止め
最後を名詞や代名詞で終わらせる。
例 五月雨をあつめて早し最上川 →85ページ

比喩
何かをたとえる。
例 塚も動けわが泣く声は秋の風 →104ページ

擬人法
動物や物などを人のように表現する。
例 行く春や鳥啼き魚の目は泪 →21ページ

擬音語・擬態語
具体的な音やようすなどを、音の響きで表す。
例 あかあかと日はつれなくも秋の風 →106ページ

比較
何かと比べる。
例 石山の石より白し秋の風 →108ページ

対句
対になる言葉や表現を並べる。
例 菜の花や月は東に日は西に（与謝蕪村） →135ページ

打ち消し
最後に「〜ではない」と打ち消す。
例 文月や六日も常の夜には似ず →97ページ

呼びかけ
人や物などに命令したり、よびかけたりする。
例 笈も太刀も五月にかざれ紙幟 →49ページ

数
数や順番を表す言葉を入れる。
例 田一枚植ゑて立ち去る柳かな →39ページ

色
色や、色を思い起こさせる言葉を入れる。
例 葱白く洗ひたてたるさむさかな（松尾芭蕉） →133ページ

見えるもの以外をよむ
音やにおい、肌ざわり、味などをよむ。
例 山中や菊はたをらぬ湯の匂ひ →109ページ

取り合わせ
関わりのないように思われる物事を組み合わせる。
例 むざんやな甲の下のきりぎりす →107ページ

※名前が示されていないものは、『おくのほそ道』に登場する芭蕉の句。